2024/02/28　　聖書研究会

聖書個所：コリントの信徒への手紙一 4 章 14〜21 節

〇4 章の文脈

・パウロを初め福音宣教者を裁くのはあくまでも主であり、終わりの日に「主が来られるまでは、先走って何も裁いてはいけ」ない。しかし、実際のコリント教会の状況はというと、福音宣教者の「一人を持ち上げてほかの一人をないがしろにし、高ぶる」、また神様から与えられた賜物についても自分でそれを獲得したと思い込んで高ぶり、他の人々の賜物を蔑んで裁き合う、さらには終末の希望、その約束が既に成就したと考えて、その希望を来らせるための現実の戦いを全く放棄し、放銃主義に陥って王様気分に陥っているといったものだった。

・前回の聖書個所(6〜13 節）で、パウロは感情的にもなりながらこれを厳しく指摘した。今回の聖書個所(14〜21 節)でパウロは、「こんなことを書くのは、あなたがたに恥をかかせるためではなく、愛する自分の子供として諭すためなのです」、「わたしに倣う者になりなさい」と、教会が本来あるべき姿に立ち帰るように、さらに感情をむき出しにしながらコリント教会の人々を懸命に諭していく。

〇パウロは彼の福音宣教によって生まれた教会に対して、常に変わらない注意を払い、教会の人々の健全な成長を見守っていた。そして何らかの問題が生じれば、訪問するか、信頼する同労者を送るか、または手紙を書き送ったのである。今回の聖書個所には、そのすべての方法をもって何とかコリントの教会をあるべき方向に正そうとする使徒パウロの熱情がみなぎり溢れている。

【注解】

〇「こんなことを書くのは、あなたがたに恥をかかせるためではなく、愛する自分の子供として諭すためなのです。」(14 節)

→このようにしてパウロは、この手紙をコリントの教会の人々に書き送った目的を説明する。パウロがこれまで手紙の中でコリントの教会の人々のあり様を批判してきたのは、彼らに「恥をかかせ」て自分の鬱憤を晴らそうということでは決してない。そうではなく、「愛する自分の子供として諭すため」であり、コリント教会が本来あるべき姿を取り戻すために他ならなかった。

・パウロは15節で、「福音を通し、キリスト・イエスにおいてわたしがあなたがたをもうけたのです」と言い切っている。コリントの教会はイエス・キリストの絶対的な主権のもとに(※あくまでも宣教の中心はイエス・キリスト)、パウロがひたすら福音宣教に従事する中で生み出された共同体であった。ここから、パウロは自分と教会の人々の関係を父と子の愛に基づく交わりとして説明する。

・このように自分と教会の人々の関係を父と子の愛に基づく交わりとして説明することは、今の時代においてはジェンダーの問題を含むものであるが、当時の家父長制社会の中で「父親」というのは厳格な存在であり、子供に生きた模範を身でもって示し、真理を悟らせ、教育、訓練するものとされていた。そして子供は父親に従うものとされていた。

・パウロは今回の聖書個所で、コリントの教会の人々に彼らをもうけた父親として接する。そして自分の責任として真理を悟らせ、生きた模範を身でもって示すから「わたしに倣う者になりなさい」(16節)と勧める。

・「養育係」(15節)

→父の指示のもとに子供の世話をし、学校の往復に伴い様々の面で子供をしつける奴隷のことを指す。

・そのような「養育係」がいかに数多くいたとしても、「父親が大勢いるわけではない」。そして、「父親」は「養育係」とはまったく別のものである。「養育係」は、どこまでも父の指示に従う限りにおいて子供との正常な関係を保つことができる存在に他ならない。パウロが「養育係」という言葉で指しているのは、コリントにいる自称指導者たちのことであり、彼らは「父親」であるパウロによって据えられたイエス・キリストという土台の上に教会を建て続けるのでなければ非常に恐ろしい過ちを犯すことになる。そして、子供である教会員との関係を失うことになる。

・16節の「あなたがたに勧めます。わたしに倣う者になりなさい」について、パウロはフィリピの教会に対しても(cf.フィリピの信徒への手紙3:17、4:9)、テサロニケ教会に対しても(cf.テサロニケの信徒への手紙一 1:6)、自分に倣う者となるように勧めている。ここからパウロが、福音を単に教えとして述べただけにとどまらず、福音に生きる者として自らの全存在をもって福音宣教と教会形成に生きていたことが窺えるだろう。

○「テモテをそちらに遣わしたのは、このことのためです。彼は、わたしの愛する子で、主において忠実な者であり、至るところのすべての教会でわたしが教えているとおりに、キリスト・イエスに結ばれたわたしの生き方を、あなたがたに思い起こさせるこ

とでしょう。」（17 節）

・パウロのテモテに対する信頼がよく分かる箇所。「このことのため」に、すなわちコリント教会の人々を「愛する自分の子供として諭すため」、そしてパウロに倣う者とするためにテモテをコリント教会に遣わしたことを、パウロはここで明らかにする。

・「テモテをそちらに遣わした」は、「私は今テモテをそちらに送りつつあります」という意味に訳すこともできるため、よくどちらということが問題になる。しかしテモテがパウロと共にいれば手紙の共同発信人として挙げられるのが自然であるのに、この手紙では共同発信人としては挙げられていないことから、パウロがこの手紙を書いている今、テモテは既にパウロのもとを去っていたと考えられる。

・テモテは決して目新しいことを語るのではない。パウロが既にコリントで宣べ伝え、教会がしっかりと保つべきことを語るのである。「至るところのすべての教会でわたしが教えているとおりに」とあるが、パウロやテモテはコリントにおいて他の教会と違ったことを教えているのでは決してなかった。コリントの教会が公同の教会の交わりの中で生きていたことがここから分かる。

○「わたしがもう一度あなたがたのところへ行くようなことはないと見て、高ぶっている者がいるそうです。しかし、主の御心であれば、すぐにでもあなたがたのところに行こう。そして、高ぶっている人たちの、言葉ではなく力を見せてもらおう。神の国は言葉ではなく力にあるのですから。あなたがたが望むのはどちらですか。わたしがあなたがたのところへ鞭を持って行くことですか、それとも、愛と柔和な心で行くことですか。」（18～21 節）

・テモテがコリント教会に派遣される知らせが伝えられた時、コリント教会のある人たち（すなわちコリント教会で現に影響力を持ち、教会の人々を惑わせている、パウロがこの手紙で繰り返し攻撃している人たち）は、パウロはテモテを代理として派遣するが自らはコリント教会に来ることはないだろうと想像したり、あの理由この理由で来ることができないに違いないと中傷していたと思われる。こうしたコリントでの噂を伝え聞いたパウロは、彼らの噂や中傷は思い上がりだと断言する。

・そして「主の御心であれば、すぐにでもあなたがたのところに行こう」と、「高ぶっている者」たちの想像や中傷を否定する。

・さらにパウロは、自分がコリントを訪問したならば「高ぶっている人たちの、言葉ではなく力を見せてもらおう」と鋭く迫る。「力」はカルヴァンによれば「こころからの熱心

さと純粋な気持ちをもって、主の御言葉を管理する人たちの持っている」力であり、人々を具体的にキリストにある生活に導く力に他ならない。

・「神の国は言葉ではなく力にあるのですから。」（20 節）

→「神の国」は神の支配が現在の力として働いている場であり、その先取りとしての教会もまた、その共同体、またそこに集う個人一人ひとりの生活に神の支配が力として働いていなければならない。コリント教会の一部の人々は自らの知恵を誇りとし、既に神の国に入り、その王座を占めているかのごとき振る舞いをしていたわけだが、彼らに上記のような力（人々を具体的にキリストにある生活に導く力）が本当にあるか、そしてその指導の下で教会に神の支配、その力が本当に働いているか、パウロは確証を求めている。

・最後にパウロは、「あなたがたが望むのはどちらですか。わたしがあなたがたのところへ鞭を持って行くことですか、それとも、愛と柔和な心で行くことですか」と強く迫り、コリントの教会の人々に悔い改めを促している。

・「鞭」→霊的な懲戒と訓練を指す言葉。

・ここにはコリントの教会を産み育てた指導者、愛するがゆえに訓練を重んじる「父親」としてのパウロの強い姿が前面に出ていると言えるだろう。

【今回の聖書個所から思うこと】

○「高ぶっている人たちの、言葉ではなく力を見せてもらおう」というパウロの言葉が印象に残った。「言葉ではなく力を見せてもらおう」という時の力とは何か。それは、小賢しい人間の知恵を誇りにしているコリントの教会のある人々に具体的にキリストにある生活に導く力があるかということ。もっと言えば、彼らの言葉の知恵がどのような現実を作り出しているか、つまりその言葉の知恵が生み出している成果のことであると言えるだろう。

・では、コリントの人々はどのような現実を作り出していたか。それは党派争い、仲間割れの現実でしかなかった。彼らの言葉の知恵は、そういう現実を生み出すのみだったわけである。その現実を見れば、彼らが誇っている言葉の本質が明らかになる。

・しかし、パウロは神の知恵、十字架の言葉を人々に語った。それは神の国＝神様の御支配を生み出していく確かな力であり、弱い者、貧しい者、愚かな者が、ひたすらキリストに依り頼んで生きる、そこに与えられる力である。キリストの十字架における神の力によってこそ、私たちは本当に力を発揮することができるのであり、本当に新しい現実を生み出していくことができる。